日本一のジーンズ生産工場を目指して。

10
2023

横山巧
工場長 / 生産管理

大学で法律を学んだ横山さんが選んだ就職先は、アパレル業界。「教員や銀行員になる流れに反発したじゃないですけど、スーツを着る仕事がなんとなく嫌で(笑)。当時好きだったミュージシャンの影響で古着が好きだったこともありますね。」ジーンズメーカーや婦人服小売などの会社で、営業、バイヤー、生産管理と経験を重ねて、10年前に現在の会社に入社したそうです。

入社当初から、自社ブランド「YANUK」の生産管理に携わり、工場長となって4年目。転機となったのは、4年前に本社が行っている経営学の研修に参加したこと。月に1回、1年以上かけて行われる研修で、「参加した当初、今後やるべき方向性も見えず霧の中にいたような状態のときに、本社の貝畑会長が工場に来られて色々とアドバイスをくれることがあって。そこで『グループ会社の、アメリカでジーンズNo.1と言われている工場を直接見て来い。』と。実際、アメリカの工場に行くと、設備から人事評価制度まであらゆる方策を連動させながら目標実現に取り組み成功している仕組みを目の当たりにして、「これだ！」と。そこから自分の意識も変わって、目指すべき方向性も見えてきました。」

自社の最大の特徴は、ジーンズの一貫工場であることと話す横山さん。「全体の生産計画の精度を上げないと業務のつながりが悪くなります。部門ごとに業務を行う他社のように熟練技術を強みとしてものづくりを行う会社も素晴らしいですが、自分たちは、マンパワーや継承の問題に左右されることなく、仕組みとして例えばAI化と手作業を上手く融合させるなど、全体のレベルの底上げをすることで差別化を行っています。今後も、様々なアプローチから日本でのジーンズNo.1生産工場を目指し、「YANUK」という世界で戦えるブランドを作り続けていきたいです。」

もっと生の声 Q&A

—— 嬉しかったことを教えてください。

「YANUK」はスタートして15年ほどですが、今、デビュー以来最盛期の売上を上げています。直営店は現在12店舗あり、新たにオープンする予定もあります。その要因の1つとして、売上の状況とタイムリーに連動したこの工場での生産体制があります。グループ全体で製造と販売の連携をしっかり行ってきたことが実を結んできたと実感しています。社員1人1人にも、自分たちが「YANUK」を作っているという自負があり、自分たちのやっていることがお客様の喜びに直結しているという意識がみんなのやりがいに繋がっています。

—— どんな働き方ができますか。

自社は、縫製だけでなく洗いや加工まで手掛ける一貫生産工場なので、縫った後の加工工程がすぐ横で見られて、ジーンズの全ての工程が勉強できる環境が整っています。縫製の中にも量産の縫製やサンプルの縫製があり、さらにデザイナーと商品製作に関わる企画業務など、やる気次第で選択肢が色々広がりますよ。